

調査・事例報告

コロナ禍での管理栄養士養成課程の 臨地実習の代替的取り組みにおける学生の満足度と自己評価

石澤 美代子・藤岡 由美子

Student Satisfaction and Self-Evaluation in Alternative Approaches to Clinical Training
in the Registered Dietitian Training Course during the COVID-19 Pandemic

ISHIZAWA Miyoko and FUJIOKA Yumiko

要 旨

本学における管理栄養士養成課程の臨地実習(給食経営管理論・臨床栄養学)は、病院に赴き10日間の実習を行うが、2020年1月からの新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大により、病院によっては5日間の実習となった。そのため病院実習が5日間となった学生には残り5日間を学内実習で代替することとした。

対象者は、例年通り実習した対照群(n=29)と代替的取り組みで学内にて実習した代替群(n=26)で、それぞれの実習の満足度をWEBアンケートで、自己評価を質問紙で、調査を行った。学生の満足度は4点満点で評価させたが、群間で有意差はなかった。学修目標の自己評価も群間で差がなかったが、行動目標の自己評価は代替群の学内実習における「挨拶言葉遣い」と「連絡報告」が代替群の病院実習と対照群より有意に高く、「積極的」は代替群の病院実習より有意に低く、課題と思われた。

キーワード

コロナ禍 管理栄養士 臨地実習 代替的取り組み

目 次

- I. はじめに
 - II. 方法
 - III. 結果
 - IV. 考察
 - V. 研究の限界と課題
 - VI. まとめ
- 利益相反
謝辞・追悼
文献

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が2020年1月に国内で発生し、長野県では同年2月25日に初の感染者が報告された¹⁾。感染は急激に拡大し4月16日には全国で「緊急事態宣言」²⁾が発出され、外出の自粛、圏域をまたいだ移動自粛が要請され、大学では授業の実施方法を変更せざるを得ない状況となった。臨地実習においても、同年2月28日に文部科学省・厚生労働省から事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」³⁾が出され、「実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいで実習を行って差し支えないこと。なお、これらの方法によってもなお実習施設等の代替が困難である場合、実情を踏まえ実習に変えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得することとして差し支えない」³⁾と通達がなされた。

栄養士法施行細則によれば、管理栄養士養成課程では臨地実習は必修科目⁴⁾であり、また平成14年の文部科学省・厚生労働省事務連絡「管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習について」⁵⁾において、その目的は「実践活動の場での課題発見、解決を通して、栄養評価・判定に基づく適切なマネジメントを行うために必要とされる専門的知識及び技術の統合を図り、管理栄養士として具備すべき知識及び技能を修得させること」⁵⁾と明記されている。鈴木らは「現場における実務実習は、専門職の養成の質確保にとって重要課題の一つである」⁶⁾と述べ、管理栄養士養成課程における臨地実習の必要性や重要性がうたわれている。また、中西らの現役管理栄養士への調査結果においては、「管理栄養士のめざす姿を具現化するために必要となる教育」として「養成施設における臨地実習の充実」⁷⁾が挙げられており、臨地実習に対し、現場から寄せられる期待も大きい。

2000年の栄養士法改正の趣旨を踏まえ報告された『「管理栄養士・栄養士養成施設カリキュラム等に関する検討会」報告書』⁸⁾においては、臨地実習は、「学内で修得する知識・技術を栄養管理の実践の場面に適用し、理論と実践を結びつけて理解できることをねらいとし、充実強化を図る」こととし、「特に栄

養評価・判定が行われる場で直接人と接する実習を推進するよう、臨床栄養を中心とし、公衆栄養、給食経営管理のいずれかで4単位とした」⁸⁾とあり、カリキュラム改正において、臨床栄養学の重要性が述べられている。

本学の臨地実習はI～IVの4種類があり、その中の3種類で計4単位(180時間)となるよう設定している。このうち臨地実習II(給食経営管理論・臨床栄養学)は2単位(90時間)であり、「臨地実習及び校外実習の実際(2014年版)」⁹⁾に則り、病院または介護老人保健施設⁹⁾で、10日間の実習を行うこととしている。しかし、2021年2～3月の臨地実習においては、1月14日に長野県医療非常事態宣言¹⁰⁾が発出されるなど新型コロナウイルス感染症の収束が見込めず、依頼した70病院のうち38病院に断られたり、実習の契約を交わしたのちに急遽中止の申し入れがなされたりするなどがあり、実習できる病院が限られたことから、できる限り多くの学生に病院実習を経験させるため、受け入れ可能な病院において、実習期間の10日間を半分の5日間ずつとし2クールの実習を依頼し、2倍の人数の学生を実習させることとした。また、短期間なら実習可能との回答だった病院には5日間のみ実習を引き受けていただいた。

その結果、予定通り病院で10日間の実習ができた学生と、病院実習は5日間となった学生に分かれることとなった。病院実習が5日間となった学生には、翌年度への後ろ倒しが難しかったため、前述の文部科学省・厚生労働省の事務連絡³⁾に沿い、残りの5日間を学内の実習で代替することとした。その場合、病院実習を先に行い、その後、学内実習を実施する順番を原則とした。

本研究では、この臨地実習IIにおいて新型コロナウイルス感染症の感染拡大時(以下コロナ禍)における臨地実習の代替的な取り組みと例年通り病院で10日間実習した学生との差異や、代替実習における課題を明らかにし今後の改善の示唆とすることを目的として、アンケートや質問紙にて学生の満足度や自己評価について調査・比較した。

なお、コロナ禍における管理栄養士養成課程の臨地実習の代替実習についての報告は少なく、学生の記述をテキストマイニングで可視化した報告は他に見当たらない。

II. 方法

1. 対象

2021年2～3月に臨地実習Ⅱを行った学生59名のうち、病院実習が5日間となった者で、学内実習が先になった学生1名と調査データの欠損があった学生3名を除く55名(93.2%)を対象とした。

病院実習の5日間と学内実習の5日間を組み合わせた学生を代替群(n=26)とし、例年通り病院実習を10日間実施した学生を対照群(n=29)とし図1に示した。

2. 対照群と代替群学内実習の内容

病院実習の内容は、各病院の実情に合わせ計画されるが、代表的な10日間の例を表1に示した。

代替群の学内実習の内容は、文部科学省・厚生労働省から出された令和2年6月1日の事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」¹¹⁾にある実践事例の「実習先講師を招聘し、実習先での状況や実習を行った時の対応など、通常より現場に近い授業演習を実施」に沿い、表2の通り計画した。実習内容の設定については、学生が5日間の病院実習で学んだ内容は病院ごとに差異があり確定できないため、臨床栄養の現場全体を網羅するよう病院管理栄養士の業務全般の講話や献立作成・調理実習を、コロナ禍であったため病院では経験しないと推測した栄養指導やチーム医療・他職種連携、また学生たちの関心が高かった小児の栄養管理、短期間の病院実習では習得が難しいと思われた静脈・経腸栄養などを組み込むこととした。実践的な内容とするためケーススタディやロールプレイング、グループ学習等を取り入れることとした。

学内実習の講師は、本学の臨地実習の受け入れ経験が複数回あり、学生への指導経験が豊富な現職や

病院実習5日間と 学内実習5日間	→代替群(n=26)
病院実習10日間	→対照群(n=29)

図1. 対象者

表1 病院実習(10日間)の例

	午前	午後
1日目	厨房見学・病棟見学	外来見学
2日目	カンファレンス・栄養指導見学	電子カルテ見学
3日目	病棟訪問	褥瘡回診・栄養指導見学
4日目	病棟訪問	症例検討
5日目	病棟訪問	カンファレンス・栄養指導見学
6日目	嗜好調査・病棟回診	厨房見学
7日目	栄養指導見学・嗜好調査	NST見学
8日目	厨房作業	厨房作業
9日目	厨房作業	褥瘡回診・栄養指導見学
10日目	嗜好調査まとめ	実習まとめ

表2 代替群の学内実習(5日間)の内容

日		内容	担当 管理栄養士
1日目	午前	静脈・経腸栄養(栄養計算・栄養剤の選択)	大学病院管理栄養士
	午後		
2日目	午前	管理栄養士業務と役割(ケーススタディ)	市立病院管理栄養士
	午後	チーム医療・他職種連携(ケーススタディ)	
3日目	午前	Aグループ： 栄養カウンセリング(ロールプレイング) Bグループ： 居宅介護支援栄養ケア(ケーススタディ)	県立病院管理栄養士 在宅支援医院管理栄養士
	午後	Aグループ： 居宅介護支援栄養ケア(ケーススタディ) Bグループ： 栄養カウンセリング(ロールプレイング)	在宅支援医院管理栄養士 県立病院管理栄養士
4日目	午前	小児の栄養管理(献立作成・ケーススタディ)	県立病院管理栄養士
	午後	献立作成・栄養成分別献立評価グループワーク	元病院管理栄養士A
5日目	午前	調理実習・プレゼンテーション	
	午後	給食経営管理演習	元病院管理栄養士B

元職の管理栄養士に依頼し、計7名にご担当いただいた。本学の教員は担当しなかった。

学内での実習を大学病院での実習と想定し、現・元管理栄養士から、通常時に病院実習でご指導いただいていたことに近く、かつ学内で実践可能な内容を、学生が主体的に取り組めるよう、内容に応じて集団講義・演習・実習形式で実施してもらった。なお、学生は病院実習を経験していることから、ある程度理解があると考え、学内実習プログラムの順番については不問とした。

3. 調査内容

実習の満足度は、すべての実習が終了した4月上旬に、WEB(Microsoft Forms)によりアンケート方式で調査した。質問は「実習について、総合的にどうでしたか。4点満点で評価してください。」とし4点～1点で選択させ、理由を自由記述で入力させた。なお、倫理的配慮として、学生に対し、この回答内容が成績評価に影響しないこと、また回答は強制ではないことをアンケート冒頭に明記し、それを読んでから回答するよう指示した。なお未回答者やデータ欠損者に対し回答の催促は行わなかった。

自己評価は質問紙調査で実施した。自己評価の内容は表3の通りで、8つの学修目標は特定非営利活動法人日本栄養改善学会から平成31年(2019年)に出された「平成30年度管理栄養士専門分野別人材育成事業『教育養成領域での人材育成』報告書」中の、5.管理栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム、G統合実習にある学修目標¹²⁾を臨地実習の学びの流れに沿うよう順番のみ入れ替えて適用し、7つの行動目標は「臨地実習及び校外実習の実際(2014年版)」のモデルフォーマットp.31内の評価の観点⁹⁾欄の項目から語尾を「～できる」と改変して適用し、それぞれの到達度を、1:できない、2:ややできない、3:ややできる、4:できる、の4段階で、「できたかどうか」を実習終了時点で回答させた。代替群は、病院実習と学内実習のそれぞれについて調査した。満足度、自己評価はともに個人情報情報を排除し、個人が特定できないようにしてから集計し解析した。

4. 解析

満足度の点数や自己評価は、IBM社の統計パッケージソフトSPSS(ver27.0)でKruskal-Wallis検定、Mann-WhitneyのU検定を行った。

満足の理由の記述は、計量テキスト分析「KH Coder3」によりテキストマイニングを行った。その際、アンケートに記述されていた熟語のうち、本研究において重要な意味を持ち、かつ分割されるとその重要性が低下してしまう語として、「管理栄養士」「栄養指導」「臨地実習」「事前指導」「事後指導」については一語として強制検出するよう前処理を行ってから頻出語を抽出した。かつ、学生の人数による記述の偏りを修正するためその頻出語の総数を人数で除した一人当たりの出現回数を算出した。加えて、出現した語を共起ネットワークにて分析した。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわ

表3 自己評価票

		項目
学修目標	1	事前学修を通じて、臨地実習の目標を説明できる。
	2	管理栄養士としての職業倫理を遵守し、対象(患者)および多職種とのコミュニケーションを実践できる。
	3	栄養管理の実践を想定し、社会制度や法的根拠をふまえて管理栄養士の位置づけと役割を説明できる。
	4	対象(患者)の栄養状態とその生活背景を、総合的に評価できる。
	5	課題の優先順位をつけて、目標を設定できる。
	6	人的・経済的資源を考慮した、栄養介入および評価の計画を立案し説明できる。
	7	立案した計画を批判的に考察し、改善案を提案できる。
	8	事後学習を通じて、栄養管理の実践を行うために必要な知識・技術の修得状況を自己分析できる。
行動目標	1	時間、指示、規則を守ることができる。
	2	身だしなみが適切にできる。
	3	挨拶・言葉遣いが適切にできる。
	4	諸注意を守り節度・協調的な態度ができる。
	5	積極的に実習に取り組むことができる。
	6	仕事に責任感を持つことができる。
	7	実習指導者への連絡・報告・記録が速やかにできる。

ち共起の程度が強い語を線で結んだものである。語を囲む円(ノード)の大きさは出現回数の多さを表し、線で結ばれている円は関連性が強いことをさす。さらに、語と語の結びつきの度合いを表す指標であるJaccard係数を求めた。

Ⅲ. 結果

1. 満足度

1) 点数の人数(比率)

点数別の人数と比率を図2に示した。

4点満点の回答数が代替群の病院実習で22名(84.6%)、学内実習21名(80.8%)であり、対照群の28名(96.6%)より少なかったが、有意差は見られなかった。

2) 満足の理由

学生の記述において、代替群の学内実習では、「様々な病院の先生の知識や考え方を学ぶことができたため」、「様々な病院の管理栄養士の先生の講義をお聞きし学ばせていただくが多かったため」という内容が多くみられ、同群の病院実習では、「実際の病院で栄養管理を学ばせていただき大学ではできない学びをさせていただいたため」や「病院管理栄養士の業務や役割について多くのことを学ぶことができたため」、そして対照群では、「実際に病院で働いている管理栄養士の方を見て学ぶことができた

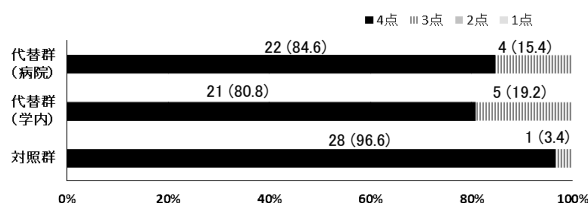


図2. 満足度評価の点数別人数と比率

ため」、「NST回診や栄養指導などを実際に見学させていただき、患者さんの表情、声、それに対する管理栄養士の対応を目で見て学ぶことができたため」という内容の記述が多くみられた。

それらについてテキストマイニングにて頻出語の抽出を行ったのち、その頻出語の一人当たりの出現回数を求めた。その結果は表4の通りで、最頻出は、代替群の学内実習における「病院」で0.85回、次に同群同実習の「学ぶ」0.81回で、それぞれの語の出現回数は代替群の病院実習(0.50回、0.38回)、対照群(0.34回、0.41回)であった。

また、特徴的な語として、「管理栄養士」が代替群の学内実習で0.35回であり、同群の病院実習0.46回、対照群0.52回より少なく、「患者」は代替群の学内実習では0回で(出現せず)、同群病院実習0.31回、対照群0.38回より少なかった。

3) 共起ネットワークとJaccard係数

各群の共起ネットワークを図3~5に示す。

それぞれの群の中において出現数が多めで、かつ、とても強い関連(Jaccard係数0.30以上)が見られたのは、代替群の病院実習(図3)では、「栄養指導・見学・現場・病棟」、「病院・実際・出来る・学ぶ」、「管理栄養士・業務・役割」であり、対照群(図4)では、「病院・管理栄養士・実際・患者・現場」、「栄養指導・見学」であった。一方、代替群の学内実習(図5)では「病院・実習・学ぶ」、「管理栄養士・先生・様々」であった。

一人当たりの頻出語で多かった「病院・管理栄養士」のJaccard係数は、代替群の病院実習で0.43、対照群では0.40であったが、代替群の学内実習では「病院・管理栄養士」の語は、線が結ばれず、Jaccard係数は算出されなかった。

表4 満足度の理由の頻出語(一人当たりの出現回数)

グループ	学内	病院	管理栄養士	先生	学べる
代替群 (n=26)	病院(0.85) 学ぶ(0.81) 実習(0.58) 様々(0.38) 管理栄養士(0.35)	実際(0.54) 病院(0.50) 管理栄養士(0.46) 学ぶ(0.38) 栄養指導(0.35)	先生(0.35) 学べる(0.27)	患者(0.31) 業務(0.31)	
対照群 (n=29)	管理栄養士(0.52) 学ぶ(0.41) 患者(0.38) 見学(0.38) 実際(0.38) 病院(0.34) 栄養指導(0.24)				

※注目した語「管理栄養士」、「患者」に網掛けをした。

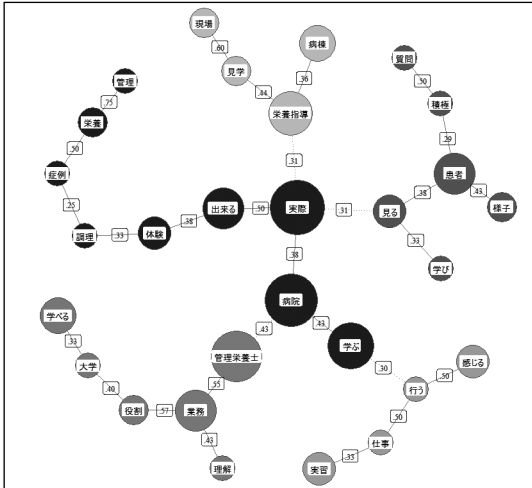


図3. 代替群(病院実習)の共起ネットワーク

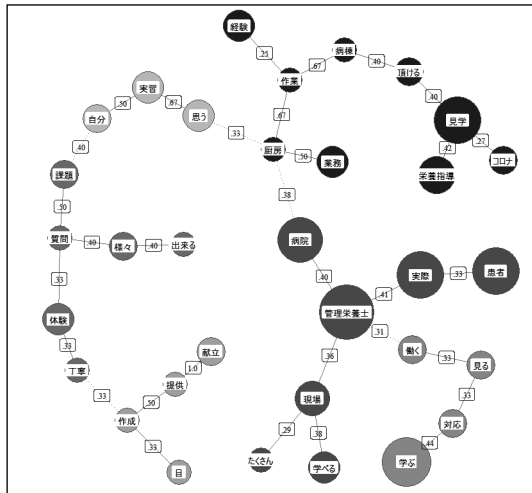


図4. 対照群の共起ネットワーク

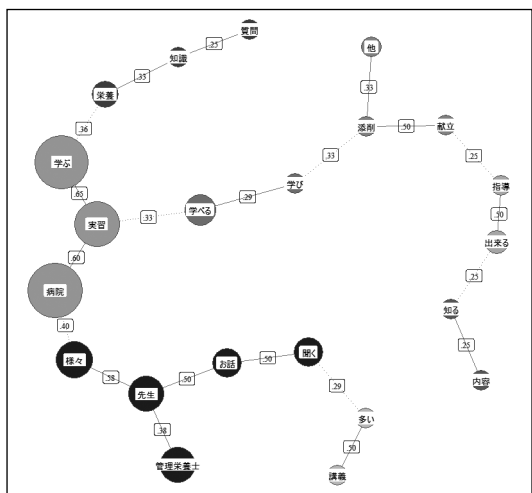


図5. 代替群(学内実習)の共起ネットワーク

2. 自己評価

自己評価の分析結果を表5に示す。

学修目標に対する自己評価では、8項目すべてにおいて、群間に差がなかった。

行動目標に対する自己評価では「1 指示順守」「3 挨拶言葉遣い」「4 協調態度」「5 積極的」「7 連絡報告」においてKruskal-Wallis検定では有意差が見られたが、Mann-WhitneyのU検定では「1 指示順守」「4 協調態度」は有意差はみられず、代替群の学内実習における「3 挨拶言葉遣い」と「7 連絡報告」が代替群の病院実習と対照群より有意 ($p \times 3 < 0.05$) に高かったが、「5 積極的」は代替群の病院実習より有意 ($p \times 3 < 0.05$) に低い結果となった。

IV. 考察

代替的な取組を実施した状況について管理栄養士養成課程における報告は少ないが、看護系大学では多くの報告がある。日本看護系大学協議会の調査では、83.4%の大学で臨地実習の変更が予定され約8割の大学が学内実習を予定している¹³⁾と回答しており、また看護系大学の有識者会議によれば、一部でも代替措置を講じた281課程のうち90.7%が学内実習・学内演習を講じている¹⁴⁾と報告されている。このように他職種も学内実習にて代替するなか、本学管理栄養士養成課程の学生において学内実習を用いて代替措置を行ったので、その満足度と自己評価を分析した。

1. 満足度

学生の満足度の点数において、代替群は対照群より低かったが、有意差は見られなかったため、この代替的な取り組みについておおむね満足が得られ、差はなかったと推測された。

下村らは、管理栄養士養成課程の臨床栄養学・給食運営臨地実習の代替実習において、実習項目(プログラム)別と実習全体の満足度の調査を行い、実習全体の「大変満足」「満足」は、病院実習群において70.5%、学内実習群において62.6%と報告している¹⁵⁾。この報告における学内実習は病院での実習がない“完全学内型”であり、本研究における“病院実

習後の学内実習”と同一ではないが、病院実習群の
方が満足度が高めと、本研究と同様の結果となっ
ている。しかし、実習項目別に詳細に聞き取って
おり、本研究における全体の感想的な満足度調
査では、コロナ禍でありながら実習できただけ
で満足という観点での回答も含まれると思われ
、今後は調査項目の検討が必要と思われた。

本研究における学内実習の満足度の高さにつ
いては、代替実習であっても臨床の現・元職の
管理栄養士により「病院で学ぶ」ことが意識づ
けられたため、高い満足度に繋がったと思われ
る。また、今回講師をご担当いただいた管理栄
養士の方々は、科長等の管理職の立場の方が
多く、本学の臨地実習指導の経験が豊富であ
ったため、将来ある学生への指導に対

し、丁寧かつ熱心にご指導いただいたことも高
評価につながったと思われる。

満足理由について、代替群の学内実習では「
様々な病院の先生の知識や考え方を学ぶこと
ができた」等の記述が多くあり、テキストマイ
ニングの結果から、「病院」「学ぶ」「実習」
「様々」が頻出しており、様々な管理栄養士
からそれぞれの病院について多様に学べたこ
とが大きな要因であったと考えられる。一方
で、代替群の病院実習や対照群、つまり5日
でも10日でも病院で実習した群においては
、「実際に病院で働いている管理栄養士の方
を見て学ぶことができた」等の記述が多く、
頻出語では「管理栄養士」や「病院」、「患
者」、「実際」が多く出現し、共起ネットワ
ークでは「病院」と「管理栄養士」の関連も
強く表れて

表5 学習目標と行動目標の自己評価

学修目標	群	点数	p値 [†]	行動目標	群	点数	p値 [†]	多重比較 [‡]
1 目標説明	代替群(病院)	4.0(3.0, 4.0)	0.833	1 指示遵守	代替群(病院)	4.0(4.0, 4.0)	0.009 [†]	
	代替群(学内)	4.0(3.0, 4.0)			代替群(学内)	4.0(4.0, 4.0)		
	対 照 群	4.0(3.0, 4.0)			対 照 群	4.0(4.0, 4.0)		
2 倫理コミュ	代替群(病院)	3.0(3.0, 3.0)	0.432	2 身支度	代替群(病院)	4.0(4.0, 4.0)	0.063	
	代替群(学内)	3.0(3.0, 3.25)			代替群(学内)	4.0(4.0, 4.0)		
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)			対 照 群	4.0(4.0, 4.0)		
3 位置役割	代替群(病院)	3.0(3.0, 4.0)	0.524	3 挨拶言葉	代替群(病院)	4.0(3.0, 4.0)	0.004 [†]	a
	代替群(学内)	3.5(3.0, 4.0)			代替群(学内)	4.0(4.0, 4.0)		b
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)			対 照 群	4.0(3.0, 4.0)		a
4 患者評価	代替群(病院)	3.0(3.0, 4.0)	0.913	4 協調態度	代替群(病院)	4.0(4.0, 4.0)	0.012 [†]	
	代替群(学内)	3.0(3.0, 4.0)			代替群(学内)	4.0(4.0, 4.0)		
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)			対 照 群	4.0(3.0, 4.0)		
5 優先目標	代替群(病院)	3.0(3.0, 4.0)	0.465	5 積極的	代替群(病院)	4.0(3.0, 4.0)	0.011 [†]	a
	代替群(学内)	3.0(3.0, 4.0)			代替群(学内)	3.0(3.0, 4.0)		b
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)			対 照 群	3.0(3.0, 4.0)		ab
6 介入計画	代替群(病院)	3.0(3.0, 3.0)	0.205	6 責任感	代替群(病院)	4.0(3.0, 4.0)	0.649	
	代替群(学内)	3.0(3.0, 4.0)			代替群(学内)	4.0(3.0, 4.0)		
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)			対 照 群	4.0(3.5, 4.0)		
7 改善提案	代替群(病院)	3.0(3.0, 4.0)	0.307	7 連絡報告	代替群(病院)	3.5(3.0, 4.0)	0.010 [†]	a
	代替群(学内)	3.0(3.0, 4.0)			代替群(学内)	4.0(4.0, 4.0)		b
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)			対 照 群	3.0(3.0, 4.0)		a
8 自己分析	代替群(病院)	4.0(3.0, 4.0)	0.248	数値は、中央値(25, 75パーセントイル値)				
	代替群(学内)	3.0(3.0, 4.0)		† Kruskal - Wallis検定				
	対 照 群	3.0(3.0, 4.0)		‡ 異なるアルファベットは有意差が認められたことを示す (Bonferroni補正のMann-WhitneyのU検定による多重比較を行った(p×3<0.05))				

いるが、代替群の学内実習では、「病院」は多く出現するものの、「管理栄養士」は出現が少なく、「患者」や「実際」は出現せず、共起ネットワークでは「病院」と「管理栄養士」の語が結びつかなかったことから、学内実習においては実際の患者と管理栄養士を結びつけて学ぶことが難しかったと思われる。

中西らは、「現役管理栄養士が考える管理栄養士がめざす姿は、①エビデンスに基づいた知識を有して多職種と連携できること、②対象者に寄り添った支援ができること、③専門的な知識を基に栄養指導を行うこと、の3つに大別された。」⁷⁾としており、病院の管理栄養士が患者に行う栄養指導の実際を学べるような実習内容を組み立てていく必要性が示唆された。コミュニケーションや多職種との連携を重要視していることから、学生の積極性を育てていくことは重要であると思われる。

したがって、前述の事務連絡「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」の実践事例に掲載されているような、シュミレーターを用いたり、オンライン模擬実習、病院と大学をオンラインでつなぐ¹¹⁾等に加え、動画の視聴や、患者を想定し場面設定をしたり、模擬患者を招聘し患者や病室を再現したり、病院で働く他の職種から話を聞くなどし、より現場のリアリティを感じさせ、「管理栄養士」や「病院」、「患者」、「実際」をつなげるような学びの工夫が必要であると思われる。ただし、山口らの報告によれば、動画の視聴については、60.6%の学生に役立ったとする一方、「タイムリーに質問しづらい」¹⁶⁾との回答もあることから、疑問点への迅速な対応に配慮が必要である。さらに、遠藤らによれば、「病院実習により栄養面接技術の向上がみられ」、特に「栄養指導見学の有無は、医療面接技術向上に直接影響すると考えられた」¹⁷⁾と述べられており、病院での栄養指導または模擬栄養指導をオンラインで見学することも学生の技術向上に寄与できると考えられた。このように様々な方法を用いる等で、満足度の更なる上昇が可能と考えられる。

2. 自己評価

学修目標に対する自己評価においては、代替群の学内実習は、対照群や代替群の病院実習と有意差が

なかったため、代替の学内実習でも学修目標や行動目標が達成できたと思われた。

行動目標に対する自己評価では、「3 挨拶・言葉遣いが適切にできる。」と「7 実習指導者への連絡・報告・記録が速やかにできる。」における自己評価が、代替群の学内実習では有意に高かった。これは、学内実習の運営の担当を本学教員が行っていたため、学生からすると慣れた相手であり過度の緊張をせずに済んだことや、事前指導においてまさしく当該教員から注意され続けた基本的事項であったことから実行意欲が高かったためと思われる。一方、「5 積極的に取り組むことができる。」については、代替群の学内実習において自己評価が有意に低かった。学内実習では大勢で受講しており、病院のように1～2名で「積極的に」行動しなければならない場面に晒されにくく積極的に行動すべき場面が少なかったため、自己評価が低かったことが推測された。中西らによれば、「現役管理栄養士から管理栄養士に最も求められる資質・能力は“コミュニケーションスキル”である」⁷⁾として、また城田らは、オンラインでの実習経験を踏まえ、「管理栄養士はどのような職域であっても、『人対人』であり、コミュニケーション能力に加え、専門職としての高度な知識、それを伝える技術、そして対象者を尊重し指導・相談のできる人徳、さらに自然科学としてとらえ考える力が必要である」¹⁸⁾と報告しており、学生の積極性を育てていくことは重要であると思われる。

以上のことから、コロナ禍における代替実習は、学生の満足度と自己評価によれば概ね有効であったことが推察された。しかし医学生や看護学生など医療系職種は臨床実習の減少を不安に感じており^{19, 20)}、大森ら²¹⁾は、看護系臨地実習ですべての日程を学内実習に振り替えた場合において「学内実習では十分な学修ができたとはいえ、臨地実習において患者との直接的な関わりによる学びの重要性を再認識した」と患者との関係性の構築に不安を述べている。また、看護師等養成所に向けて発出された文部科学省の事務連絡では、「可能な限り臨地での実習を実施すること」²²⁾とあり、大沼らは看護系大学生において「臨地に向いて実習したことで、在宅看護における感染予防と看護師の職務を理解していたことが明らかとなった。変則的実習であっても臨地での学習の学びが大きいことが示唆された。」²³⁾と述べ、

ともに臨地での実習を推奨している。また日本看護学校協議会共済会の調査では「リモート学習や疑似体験では十分に知りえない現場のスピード感、優先順位判断、自身の体調不良や感情の揺れが業務にどう響くかの自覚等々、多要素を卒後に補う必要がある」²⁴⁾とリモート学習等の不安点を、大鳥らは、看護学実習において「代替実習では、患者との関わりをもてないながらも学生にリアリティを感じられる工夫を」²⁵⁾するよう述べており、これらはいずれも、医療職である管理栄養士も同様と考えられる。

特定非営利活動法人日本栄養改善学会から出された「平成29年度管理栄養士専門分野別人材育成事業『教育養成領域での人材育成』報告書」では、管理栄養士・栄養士の期待される像として「栄養・食を通して、人々の健康と幸福に貢献する」と提言している²⁶⁾。世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症は、日本では2023年5月8日に感染症法上の5類に移行した²⁴⁾ものの、2023年1月27日の「新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけの変更等に関する対応方針について」において「今後、オミクロン株とは大きく病原性が異なる変異株が出現するなど、科学的な前提が異なる状況になれば、ただちに対応を見直す」²⁵⁾とあるようにいまだ予断を許さないが、管理栄養士をめざす学生は毎年存在し、臨地での実習を体験し、人々の健康と幸福に貢献すべく管理栄養士として就業していくため、今後も、可能な限り有用な方法を模索していく。

V. 研究の限界と課題

本研究の限界点として、学内実習の計画が実施の3週間前と急であったため、満足度アンケート調査の内容が検討不足により実習プログラム別等詳細でなく全体の感想のみであったこと、回答時期について、代替群は学内実習が終わってからその前に終了していた病院実習の分も併せて調査したことが挙げられる。終了時点で即時調査することでより正確な回答が得られると思われる。

今後の課題として、積極性を育むプログラムの構築が挙げられる。城田らが述べたように管理栄養士は「人対人」である。コミュニケーション能力を向上させるような学習方法について再考し、その達成度を図る評価方法の検討等が必要と思われる。コロ

ナ禍が続くまたは今後の新しいパンデミックの可能性も否定できないなか、次に代替実習を行う場合の課題として検討していく。

VI. まとめ

コロナ禍での代替的な臨地実習における学生の満足度と自己評価では、病院実習と学内実習を組み合わせ実施しても、大きな差はなかった。しかし「病院管理栄養士や患者の実際の現場を意識づけ、積極性を育む」という病院実習での教育効果が再確認できた一方、行動目標「積極的に取り組む」において代替の取り組みにおける課題が明確になった。

利益相反

利益相反はない。

謝辞・追悼

アンケートにご協力いただいた本学健康栄養学科の学生(当時4年生)に感謝申し上げます。

また、今回の病院実習・学内実習において学生をご指導いただいた病院管理栄養士の皆様、講師の皆様、さらに、実習の運営においてご協力いただいた本学人間健康学部健康栄養学科水野尚子助手、実習の運営と解析においてご尽力いただいた成瀬祐子専任講師に謝意を表します。

本実習の科目担当者であり、その遂行に尽力され、2023年5月に逝去された藤岡由美子准教授に深い哀悼の意を捧げます。

なお、藤岡准教授が本稿の筆者となることについて、生前に本人に同意を得ています。

文献

- 1) 日本経済新聞, 「長野県で初の新型コロナ感染者 松本地域の60代男性」2020年2月25日
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO56020020V20C20A200000/> (閲覧日2022.9.9).
- 2) 首相官邸, 新型コロナウイルス感染症対策本部(第29回)令和2年4月16日
https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/16corona.html (閲覧日2023.9.21).
- 3) 文部科学省・厚生労働省, 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について, 事務連絡, 令和2年2月28日
<https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf> (閲覧日2023.10.13).
- 4) 厚生労働省, 栄養士法施行規則(昭和23年1月16日), 第十一条(平成7年4月1日)
https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=78319000&dataType=0&pageNo=1 (閲覧日2023.9.21).
- 5) 文部科学省高等教育長・厚生労働省健康局長通知, 管理栄養士養成施設における臨地実習及び栄養士養成施設における校外実習について, 文科高第27号健発第0401009号, 平成14年4月1日
https://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/shokan/kankeihourei/documents/h14_0401.pdf (閲覧日2023.10.13).
- 6) 鈴木道子・辻雅子・片山一男, 管理栄養士・栄養士養成課程における学外実習制度の変遷とその決定過程, 尚綱学院大学紀要第59号, 2010, pp.57-68.
- 7) 中西朋子・小切間美保・林美美ほか, 管理栄養士のめざす姿とその実現に向けて求められる資質・能力について—現役管理栄養士を対象とした調査結果から—, 栄養学雑誌, Vol77, Supplement, 2018, S44-S56.
- 8) 厚生労働省, 「管理栄養士・栄養士養成施設カリキュラム等に関する検討会」報告書, 平成13年2月5日.
- 9) (公社)日本栄養士会・(一社)全国栄養士養成協会編, 臨地実習及び校外実習の実際(2014年版), 平成26年4月.
- 10) 新型コロナウイルス感染症長野県対策本部, 医療非常事態宣言, 令和3年1月14日
<https://www.pref.nagano.lg.jp/koho/kensei/koho/chijikaiken/2020/documents/iryohijoujitaisengen.pdf> (閲覧日2023.9.2).
- 11) 文部科学省・厚生労働省, 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について, 事務連絡, 令和2年6月1日.
<https://www.mhlw.go.jp/content/000636146.pdf> (閲覧日2023.10.13).
- 12) 特定非営利活動法人日本栄養改善学会, 平成30年度管理栄養士専門分野別人材育成事業「教育養成領域での人材育成」報告書, 平成31年3月.
- 13) 一般社団法人日本看護系大学協議会, 日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会 2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査A調査・B調査報告書, 2021年4月
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyouasaAB.pdf> (閲覧日2023.10.13).
- 14) 文部科学省, 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について, 令和3年(2021年)6月8日
https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf (閲覧日2023.10.13).
- 15) 下村美保・吉村良孝, 新型コロナウイルスの感染拡大に伴い生じた臨床栄養学臨地実習・給食運営臨地実習の代替実習についての報告, 別府大学紀要大63号, pp159-165, 2022.
- 16) 山口裕子・村瀬美香・松本佳代ほか, 臨地実習時間の短縮に伴う動画を用いた学内実習における教育方法についての報告～在宅看護実習での学生アンケート結果から～, 熊本保健科学大学研究誌, No.18, pp.103-115.
- 17) 遠藤道代, 管理栄養士課程学生における臨床栄養学臨地実習が医療面接技術に与える影響, 仙台白百合女子大学紀要, 14巻, pp43-52, 2010.
- 18) 城田直子・吉野知子・金澤良枝, 管理栄養士養成施設でのオンライン講義・実習の現状と課題～東京家政大学～, 臨床栄養, 医歯薬出版株式会社, 第138巻第1号, 医歯薬出版株式会社, 2021年1月
- 19) 焦る医学生 コロナ禍で臨床実習できず「将来に不安」, 日本経済新聞, 2020年7月2日
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO61054380S0A700C2CE0000/> (閲覧日2022.9.8).
- 20) 看護学生たちの「現場実習」中止相次ぐ コロナ禍で病院側の受け入れ難しく…サポート整備が急務, FNNプライムオンライン, 2022年3月19日
<https://www.fnn.jp/articles/-/332402> (閲覧日2022.9.8).
- 21) 大森美保・志田久美子・大出順ほか, コロナ禍における「基礎看護学実習Ⅱ」に関する学生の学び—代替実習としての学内実習を実施して—, 帝京科学大学教育・教職研究第7巻第2号, pp137-146, 2022.
- 22) 文部科学省高等教育局医学教育課, 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について(周知), 事務連絡, 令和2年6月23日.
https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (閲覧日2023.10.13)
- 23) 大沼由香・星純子・鹿野卓子, 新型コロナウ

- イルスパンデミック期における在宅看護実習による学生の学び, 伝統医療看護連携研究, 第2巻第2号, pp65-73, 2021.
- 24) 一般社団法人日本看護学校協議会共済会, 看護職養成校の新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大への対応に関する調査, 2021年2月16日.
- 25) 大鳥和子・齋藤みどり, コロナ禍における成人看護学実習 I (慢性期看護実習) 第2報—学内実習を主体とした代替実習の効果—, 了徳寺大学研究紀要第16号, pp205-218, 2021.
- 26) 特定非営利活動法人日本栄養改善学会, 平成29年度管理栄養士専門分野別人材育成事業「教育養成領域での人材育成」報告書, 平成30年3月.
- 27) 厚生労働省, 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に係る新型インフルエンザ等感染症から5類感染症への移行について【直近の感染状況と5類感染症への移行について】
<https://www.mhlw.go.jp/content/001091810.pdf>(閲覧日2023.10.13).
- 28) 厚生労働省, 新型コロナウイルス感染症対策本部, 新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけの変更等に関する対応方針について, 令和5年1月27日
<https://www.mhlw.go.jp/content/10906000/001059900.pdf>(閲覧日2023.10.13).